シリーズ
虹色のひろば

― 会員の自由な投稿のひろば ―

# 先輩からの便り　中村幸生

## なぜ短歌を作るのか

（旧制）旅順中学の国語教師畑田先生はたいへん立派な方で、もし将来教師になったならば、こんな教師になりたいと思ったほどの人だった。惜しむらくは捕虜となってシベリアで亡くなった。涙、涙。

この人の指導で、僕は文語文法が強くなり、動詞助動詞助詞は的確に使えるようになった。それは良かったが悪いこともある。時は 1930 年代、昭和 15 年頃だから英語は憎まれていて、授業時間は減らされ（廃止ではない）、そのため僕は英語が下手で戦後に苦労する。

さて（旧制）旅順高校は入試に際して英語の比重を軽くし、大和魂を尊重して国語を重視した。だから畑田先生のお陰で入学できた。昭和 17 年。

この時代の大和魂とは良い意味の大和魂ではなくて、米英を憎んで戦争に突き進むという意味だった。僕が尊敬する先生はどんどん辞めていった。理由はまったく知らされなかった。憎らしい教師だけが残って、生徒圧迫に力を注いだ。ドイツ語教師の中では、ナチスを礼賛する教師が残り、礼賛しない人たちは立ち去った。辞職してどこに行ったのだろう。食えただろうか。将来こんな世の中になったら大変ではないか。気になる事である。

改憲は否というべき一票を
投ずるために生きねばならぬ

ある時河合栄治郎（注）の著書を読んでいた吉田君は教師（ナチス礼賛のドイツ語教師）に罵倒された。その教師は本を床にたたき付けて叫んだ。

「まだこんな本（第二学生物語）を読んでいるのか！」

そんな教師たちの中で藤田先生（古典）だけは生徒と親しみ、質問には気軽に応対してくれた。この先生の授業は良い意味の大和魂であって軍国主義ではなかった。その藤田先生が僕の短歌を高く評価してくれたのである。僕はクラス最高の歌人であった。

（注）河合栄治郎
社会政策学者　東大教授　自由主義者として弾圧された。

## 学徒出陣

学徒出陣というと「貴方はあの中（あの雨中の行進）にいたのですか」と問われるのだが、あれは昭和 18 年秋の神宮外苑の事。僕ははるかに離れて旅順にいた。年は 18 歳。まだ徴兵の年齢ではない。出陣したのは 20 歳以上で徴兵を猶予されていた学生たちが、その猶予を取り消されて徴兵されることになった人達である。

僕のクラスでは二浪の O 君がこれに該当した。盛大な、且つ悲しい見送り（学校側は何一つしなかった。）を受けて彼は旅立った。後日、約一年後、彼は軍服も凜々しく軍刀も厳めしく、軍靴の音高く我々を訪問する。彼は後輩（同級生であるが年下の後輩）、やがて徴兵検査を受けて軍隊に入る友人たちに教訓の言葉を残した。

『馬鹿になれ』

（馬鹿になったら俺のように偉くなれる。馬鹿にならなければ悲劇となるぞ。悲劇のヒーローになるな。だから生き残る道はただ一つ。馬鹿になって生き残るのだ）

馬鹿になって出世した者も、馬鹿になれずに悲劇のヒーローになった者も、無垢の赤ちゃんさえも戦火に焼かれて死んでいった。だからぼくは畑田先生・藤田先生の教えてくれた短歌の道を歩んで『馬鹿になってはいけない』と歌いたいのである。

中村さんは 1925 年青島（チンタオ：中国山東省）生まれ。6 月で 93 歳。戦後、東京大学を卒業後、渋川高校、高崎高校、渋川女子高校で世界史を教えた。今年 1 月に「上毛歌壇」（『朝日』群馬版）で入選した歌について文章を寄せていただきました。フォーラムで長く教育相談を担当した大先輩です。